

## 出エジプト記31章「祭具を作る奉仕」

### 1A 御霊の満たし 1-11

1B 知恵の務め 1-5

2B 主からの知恵 6-11

### 2A 安息日の遵守 12-18

1B イスラエルを聖別される方 12-13

2B 仕事の禁止 14-15

3B 永遠の印 16-18

## 本文

出エジプト記31章を開いてください。私たちの学びは、モーセがシナイ山で、幕屋を造ることについて指示を受けているところを読んでいます。25章から27章までが、幕屋におけるそれぞれの部分についての教えで、28-29章が祭司の装束と任命についての教えでした。30章は、その祭司が行う務めに関わるもので、主に香を焚くことについてです。香壇、そして香と香油の調合、それから宮への納入金の教えがありました。そして31章です。主は、これらの祭具、幕屋のそれぞれの部分を作る者たちを名指しで召し出されます。

私たちはここから、具体的に主に対して奉仕をする働きについて学んでいくことができます。主に対する礼拝において、祭司がその務めをする時に、聖別されなければならない、細心の注意が払われますが、そのような目に見えない神に対しての奉仕のみならず、目に見える形での奉仕、具体的にしていかなければいけないことが、教会にはあります。

それを、使徒6章には「執事」という形で現れます。ギリシア語を使うユダヤ人が、ヘブル語を使うユダヤ人に対して苦情を申し立て、寡の配給がなござりにされていたとのことでした。それで、使徒たちは七人の者を食卓のことに仕えさせました。使徒たちは、食卓に仕える者たちを、単にそのようなことに慣れている人を選びませんでした。「6:3 そこで、兄弟たち。あなたがたの中から、御霊と知恵に満ちた、評判の良い人たちを七人選びなさい。」と命じています。御霊と知恵に満ちているということです。31章にて強調されているのが、神の命じられた祭具を造るのに、金銀の細工の意匠をこらすのに、知恵の御霊に満たされている者を神が選ばれている、ということです。使徒6章に戻りますと、七人のうちの一人が、ステパノという人で、彼は人々の間で大きな不思議の業を行っていて、人々が、「6:10 彼の語る時の知恵と御霊に対抗することができなかった。」とあります。ここでも、知恵と御霊という言葉が出て来ます。主がいかに、ご自分の御霊によって、ご自分の働きをしてほしいか、私たちに願われていることが分かりますね。そして、福音を語る時における知恵だけではなく、まさに食卓で仕える時にも御霊と知恵が必要であることを使徒たちは教えて

いるのです。

私たちキリスト教会には、大きな過ちがあります。それは、御霊の領域というのは、説教であるとか、賛美であるとか、目に見えないところにおける奉仕だけに限定することです。前回の学びで、幕屋の祭具の全てに、そして祭司の装束までも全てに香油を注ぐように命じられていましたね。どんな小さなことにも、神の油注ぎ、すなわち御霊の注ぎが必要なのです。まず、力において御霊が必要です。自分の能力ではできません。次に知恵において、御霊が必要です。自分がどんなに考えても、どんな知恵によっても、主からのものでなければ意味がないのです。御霊の働きは、説教から賛美、そして賛美から機材設定、機材設定から掃除、掃除からトイレ掃除、人々への挨拶、あらゆるところに及ぶのです。そういった奉仕を見下げる傾向があります、そして、そういった奉仕についてはそれほど祈らない傾向があります。それで、祈らなくてもいいのね、ということになります。

そして、「奉仕は、自分たちの能力を持って来て行なうのだ」と思っていることが残念です。一度、笑ってしまったけれども、けれども悲しくなった、ある人の発言を読みました。「異言は、使徒が宣教地に行く時にその言語を使っていないところで与えられた賜物であって、今は外国語学校も整えられているから、その必要はなくなった。」笑ったのは、異言が、福音宣教で使われたという記述は何一つ聖書にはないのです。神への賛美として、弟子たちが語っているのを、聞いていたユダヤ人が理解したことは書いていますが、福音宣教は全て、知性を働かせた言葉で使徒たちは語っています。そして悲しくなったのは、御霊にしかできない働きを、人間の知性や努力にとって変えようとしていたことです。もちろん外国語の習得のために学校があることは素晴らしいことです。けれども、御霊の賜物とそういった教育機関と取って変えるという意見が、ここに、キリスト教会が力を失い、知恵を失った原因があります。

今は異言のことを話しましたが、それは一例で、あらゆるところに、「主を求めなくとも、これらの物理的なものがあるから」という発想は危険です。アサというユダ王国の王は、晩年に病の中で、主を求めないで医者を求めたという言葉があります。それは医学を否定しているのではなく、どこに頼っているのか？という問いかけなのです。そういうことで、「たかが幕屋、されど幕屋」なのです。これを造るのに、主は名指して召し出し、そして知恵の務めにおいて、御霊で満たされました。

### 1A 御霊の満たし 1-11

#### 1B 知恵の務め 1-5

1【主】はモーセに次のように告げられた。2「見よ。わたしは、ユダ部族に属する、フルの子ウリの子ベツアルエルを名指して召し、3 彼に、知恵と英知と知識とあらゆる務めにおいて、神の霊を満たした。4 それは、彼が金や銀や青銅の細工に意匠を凝らし、5 はめ込みの宝石を彫刻し、木を彫刻し、あらゆる仕事をするためである。

主は、ここにあるように、ユダ族のベツアルエルという人を名指しで召しておられます。その名は、「神の陰で」という意味で、神に守られているという意味の名です。召しから始まり、そして、知恵、英知(これは理解と訳せます)、そして知識の務めにおいて、神の霊で満たされます。

奉仕において言えることですが、聖書では、主が人を召されて、何かの働きをされるようにされています。祭司は、主に召されて、選ばれて仕えるのであり、自分の意志でその奉仕にあずかるのではありません(ヘブル 5:4)。神が選ばれ、召し出されるのです。「ヨハ 15:16 あなたがたがわたしを選んだのではなく、わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命しました。それは、あなたがたが行って実を結び、その実が残るようになるため、また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものをすべて、父が与えてくださるようになるためです。」

召しをどのように捉えればよいのでしょうか？そのことをお答えする前に、「どのようにして救われたことが分かりますか？」とお聞きしたいと思います。「その救いの確信を、分かりやすいように説明してください。」と尋ねるとします。難しい返答になると思います。なぜなら、それは確信であって、神の救いの真理に対して、「そのとおりです、アーメン」としか答えることのできないものだからです。救いそのものが、聖書では「神の選びと召し」によるものであることを教えています。「ローマ 8:30 神は、あらかじめ定めた人たちをさらに召し、召した人たちをさらに義と認め、義と認めた人たちにはさらに栄光をお与えになりました。」確かに自分がイエス・キリストの救いの道を選び取りました。けれども、神の呼びかけに答えたのであって、主体は神です。

そして、召しというのは、そもそもは、「主人の言いつけに聞き従う」という、僕の姿勢があるからこそ、主に言われていることに応答できるのです。自分が何かしたい、自分で何かを成し遂げるとしたら、決して神の召し声を聞き取ることはできません。そして、単に仕えるだけでなく、神から与えられた責務として行っていく「務め」であります。責任が伴うものであり、管理するという面もあります。ですから、自分の都合の良いときだけ、気が向いたときだけ何かを手伝うことが、仕えることではありません。また、自分のやりたいという漠然とした気持ちではなく、せずにはおられないという使命感の伴ったものであります。その反面、もちろん、人に言われているから機械的に行なっているというも、決して奉仕ではありません。喜んで、自発的に行うものです。

これは、祭司が聖所の中に入って、主の栄光にまみえることができる、光栄に満ちたものです。そしてその恵みを人々に分かち合っていくという喜びがあります。自分がまさに、キリストと他の人々との仲介になることです。神から与えられた賜物を用いていくことによって、人々がキリストのすばらしさと恵みにあずかっていくという、祝福に満ちた働きです。

次に、知恵、英知、知識が与えられたことについて見ます。知恵は自分のものではなく主から来ている、というものです。箴言 2 章 6 節には、「【主】が知恵を与え、御口から知識と英知が出るか

らだ。」とあります。キリストの預言をイザヤが行った時に、この方に主の霊がとどまることを告げました。そしてこう言っています。「11:2 その上に【主】の霊がとどまる。それは知恵と悟りの霊、思慮と力の霊、【主】を恐れる、知識の霊である。」聖霊の働きというと、私たちは感覚に訴えるもの、感情的になるものを想起しますが、聖書を見るとそうではありません。また、コリント第一 12 章には、御霊の賜物に「知恵の言葉」と「知識の言葉」があります。私たちは超自然なことが、私たちの考える超自然な現象でしか考えないのですが、実は、事前に超自然なことが起こっています。そして往々にしてご聖霊の働きは、自然な形で超自然なことを行なわれることが多いのです。

## 2B 主からの知恵 6-11

6 見よ。わたしは、ダン部族に属する、アヒサマクの子オホリアブを彼とともにいるようにする。わたしは、すべて心に知恵ある者の心に知恵を授ける。彼らは、わたしがあなたに命じたすべてのものを作る。7 すなわち、会見の天幕、あかしの箱、その上の『宥めの蓋』、天幕のすべての備品、8 机とその備品、きよい燭台とそのすべての器具、香の祭壇、9 全焼のささげ物の祭壇とそのすべての用具、洗盤とその台、10 式服、すなわち、祭司アロンの聖なる装束と、その子らが祭司として仕えるための装束、11 注ぎの油、聖所のための香り高い香である。彼らは、すべて、わたしがあなたに命じたとおりに作らなければならない。」

ベツアルエルの助手として、ダン族のオホリアブも召し出されました。ベツアルエルが、金や銀、青銅の細工に意匠をこらし、宝石や木の彫刻など、かなり精巧な技術が必要なものを行っているのですが、オホリアブはその他のものをすべて網羅するようです。彼自身の手によるものもあれば、おそらく彼自身にも下に、熟練工たちがいて、そして彼が監督していたのかもしれませんが。

ここで大事な言葉は、「すべて心に知恵ある者の心に知恵を授ける」ということであります。すべて知恵のある者、技術のある者は、それが神から来たものなのだという意識が必要です。ここがない人は、結局、間違った動機で行なうのです。ある人がとても興味深いことを教えてくれました。教会の奉仕についてです。「奉仕は、社会的な経験を積んでいるので、気軽に、簡単にできるようなものが多い。ところが、何のためにやっているのか？を見つめないと、ある時に、牧師を見て、「この、偉そうに！なんで人の上に立っているのか？」というような、サタンの思いに満ちていたことに気づいた。」ということです。そうなんです、自分ができることではなく、神が自分にできるようにされている、ということを知ることが必要です。

その意識、確信があるからこそ、その技能を主の命じられたとおりに行うことができます。「すべて、わたしがあなたに命じたとおりに作らなければならない。」とあります。技能のある人、能力のある人は、従うことが難しくなります。自分で出来るものがあると思っているので、奉仕におけるすべてのこと、つまり、「主に命じられていることを行う」ことができないのです。奉仕は、自分の能力を発揮するところではなく、主に命じられたことを行うことです。ですから、自分の今の技能は、主

から全て来ていることを認めなければいけません。

## **2A 安息日の遵守 12-18**

### **1B イスラエルを聖別される方 12-13**

12【主】はモーセに告げられた。13「あなたはイスラエルの子らに告げよ。あなたがたは、必ずわたしの安息を守らなければならない。これは、代々にわたり、わたしとあなたがたとの間のしるしである。わたしが【主】であり、あなたがたを聖別する者であることを、あなたがたが知るためである。

なぜ、ここで安息日の戒めを神が話されているかと言いますと、今、幕屋の用具を作りなさいという命令を主が出されたからです。たとえ、ご自分の住まわれる幕屋の用具であっても、安息日には休まなければいけないと、きつく戒めておられます。これは私たちに対する戒めでもあります。神のためだからということで行なっていることが、必ずしも主を喜ばせているとは限らないことです。イエス様は、「神のわざを行なうために、何をすべきでしょうか。」と言った群衆に対して、「ヨハ6:29 イエスは答えられた。「神が遣わした者をあなたがたが信じること、それが神のわざです。」と言われました。神がキリストにおいて行なわれたことを信じ、それに留まることこそが、私たちに對する神の第一命令なのです。

そして、これが「わたしとあなたがたとの間のしるしである。」と言われています。神が、イスラエルに与えられている印というのは、大きな意味があります。イスラエルは、エジプトにいた時に奴隷に使役されていたのであり、休暇を得ることはできませんでした。したがって、安息が与えられているということは、彼らが奴隷状態から解放されて自由にされていることの印であったのです。安息日を守ることで、自分たちの出エジプトの解放を覚え、自分たちが自由にされていることを覚えるのです。

新約聖書では、安息日は、キリストがその本体であることが書かれています。「コロ2:16-17 こういうわけですから、食べ物と飲み物について、あるいは祭りや新月や安息日のことで、だれかがあなたがたを批判することがあってはなりません。これらは、来たるべきものの影であって、本体はキリストにあります。」キリストにあつて安息日の目的が達成されました。つまり、罪の中にあつて奴隷状態であり、苦役にあつた私たちも、キリストの流された血潮によって自由にされて、安息を得たということです。「マタ 11:28 すべて疲れた人、重荷を負っている人はわたしのもとに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」そして将来に、安息が残されています。それは、天そのものです。「ヘブル 4:9-10 したがって、安息日の休みは、神の民のためにまだ残されています。神の安息に入る人は、神がご自分のわざを休まれたように、自分のわざを休むのです。」

そして、「わたしが【主】であり、あなたがたを聖別する者であることを、あなたがたが知るため

ある。」とあります。イスラエルがエジプトから贖い出されたのは、主の聖別の民になったことを知るためです。つまり、神のものとなり、神に仕える民となったということです。救いは、救いのためにあるのではなく、神に仕えるために救われ、仕えるために聖められています。天のエルサレムで、私たちが何をしているか、こう書いてあります。「黙 22:3-4 もはや、のろわれるものは何もない。神と子羊の御座が都の中にあり、神のしもべたちは神に仕え、御顔を仰ぎ見る。また、彼らの額には神の御名が記されている。」

## 2B 仕事の禁止 14-15

14 あなたがたは、この安息を守らなければならない。これは、あなたがたにとって聖なるものだからである。これを汚す者は必ず殺されなければならない。この安息中に仕事をする者はだれでも、自分の民の間から断ち切られる。15 六日間は仕事をする。しかし、七日目は【主】の聖なる全き安息である。安息日に仕事をする者は、だれでも必ず殺されなければならない。

安息日に対して、民から断ち切られるという厳しい処置があることが書かれています。これは、単に殺されるということではなく、失われるということ、共同体から断ち切れ、救われる望みがないということです。

## 3B 永遠の印 16-18

16 イスラエルの子らはこの安息を守り、永遠の契約として、代々にわたり、この安息を守らなければならない。17 これは永遠に、わたしとイスラエルの子らとの間のしるしである。それは【主】が六日間で天と地を造り、七日目にやめて、休息したからである。」

主がイスラエルを七日目に休ませる、その基本は、ご自身の創造の業にありました。六日で天地を創造し、七日目に休まれたからです。

ここでも再び、「わたしとイスラエルの子らとの間のしるしである」と強調しておられます。聖書の神は、契約を結ばれ、その度に印をもって結ばれています。ノアとの契約は、もう洪水によって全世界を覆うようなことをしない、というものでしたが、印は何でしたか？「虹」でしたね。虹が出るたびに、主は確かに水によって地を滅ぼすことはなさらないということです。そして、主がアブラハムと契約を結ばれた時のことを考えましょう。アブラハムが大きな国民になり、またアブラハムを祝福する者は祝福されるというもので、彼によって世界の部族が祝福を受けるというものでした。その印は、割礼でした。割礼を受けているということによって、アブラハムの契約の中に自分も入っていることを確認しているのです。そして、ここにモーセとの契約がありましたが、はるかに500年ぐらい飛びますと、ダビデに対して神は契約を結ばれました。それは、彼の世継ぎの子が永遠の御国を受け継ぐというものでした。その印は何か？「男の子」です。イザヤ書9章6節に預言されていますね。そして、新しい契約の印は何でしょうか？新しい契約においては、律法が心の中に書き

記されて、罪が全て赦されて、神はもう思い出さない、忘れると約束しておられるものです。この印は何でしょうか？イエス様の流された血潮です。最後の晩餐の時に、そのように語られましたね。

話を戻せば、このようにして私たちは奉仕において、安息が必要なことを知りました。マルタとマリアの話にもあります。具体的な奉仕はとても大切です、それと同時に、聖別された者として、イエス様にあって安息するというのも、私たちにとっての大切な務めです。

18 こうして主は、シナイ山でモーセと語り終えたとき、さとの板を二枚、すなわち神の指で書き記された石の板をモーセにお授けになった。

ついに主は、モーセと語り終えられました。四十日間、シナイ山にモーセはいました(24:18)。これを石の板に主ご自身が書き記されます。さとの板、二枚に書き記されました。イエス様が、姦淫の現場の女を罪に定めようとする者たちに対して、「まず罪のない者が石を投げなさい」と言われた時に、地面に指で何かをお書きになっていましたね。おそらく、この神の指をもってイエス様は書かれておられたのだと思います。罪のない者は、唯一、イエスご自身でした。その方が、ご自分の主権で彼女を罪に定めないと言われました。律法をご自分の死によって成就されるからですね。こうやって石の板に書かれましたが、すぐに砕かれることになります。神のモーセとの契約は、初めから破られるという様相を帯びています。それは、後に来るキリストを待ち望ませるためでもあります。